船津和守先生を偲んで

梶原 稔 尚^{*1}・田上 秀 一^{*2}・木原 伸 一^{*3}

プラスチック成形加工第5期（平成8・9年度）会長を務められた名誉会員の船津和守先生が2019年10月1日にご逝去されました。享年78歳でした。ここに謹んで哀悼の意を捧げご冥福をお祈りいたします。

船津和守先生は、1941年（昭和16年）10月3日に福岡県にお生まれになり、1960年4月九州大学工学部機械工学科に入学、化学機械工学科へ転学科、1965年3月同学科を卒業され、1970年3月東京大学大学院工学系研究科博士課程を単位取得の上退学されたのち、1970年4月九州大学工学部講師に採用、1972年8月同助教授昇任、1981年9月同教授に昇任され、2005年3月に退職するまでの35年余の永きにわたり、化学工学の教育と研究に努め、2005年4月に九州大学名誉教授になられております（写真）。また、プラスチック成形加工学会の創立時から献身的に本学会に貢献され、本学会の会長、副会長、理事を歴任、1998年に横浜で開催されたPPS-14の国際会議議長や国際学術誌のエディターを含む広範な国際的学術活動をなされ、わが国の化学産業の発展に寄与されました。

先生は、終始一貫して学術研究と教育に専念し、国内外の学術の振興と技術の発展に多大な貢献を尽くされました。学術研究において、実社会に役立ち、かつ世界的にみて先駆的で価値ある研究開発であることを常に重視され、日本から世界に発信する切り口が鋭い研究開発を常に目指されておりました。高分子工学分野においては、高分子の溶融レオロジーと粘弾性挙動の基礎研究を実験と数値解析の両面から展開し、画期的な成果を挙げられました。さらに、基礎研究を複雑な工業的応用問題に深く繋ぐための学問の体系化を進め、高分子材料の混練から成形までを一気通貫するCAE開発を勢力的に実施されました。各種成形加工プロセスに対し開発された世界最高水準のCAE技術は、多くの民間企業においても製品予測や製造プロセスの改良・新規開発に利用されています。また、化学工学分野では、動植物細胞を用いた人工臓器の開発や有用物質生産に

退職記念事業でのご挨拶の様子

関する研究に精力を傾注され、初代肝細胞を用いたハイブリッド型人工肝臓を開発されました。肝細胞の高機能発現が維持できる球状組織体培養法を独自に確立し、この技術を用いて急性肝不全患者治療用ハイブリッド型人工肝臓を開発され、肝不全動物の救命効果を示すと同時に、大型動物による前臨床試験で肝不全に対する治療効果を実証し、日本で初めて臨床応用の審査申請を九州大学医学部倫理委員会に申請したことは当時話題となりました。さらに、人工肝臓の機能向上と装置のコンパクト化を進め、数か月の肝機能維持期間を達成するなど世界最高のパフォーマンスを世界に発信されました。これら二つの分野の業績は、国内外から高い評価を受け、化学工学会学会賞および技術賞、日本機械学会フェロー、プラスチック成形加工学会論文賞および功労者表彰など、多くの賞を受賞され、正四位瑞宝中綬章が授与されました。

思い出はたくさんありますが、記憶の中に大きくあるのは、先生の信念の強さです。学内外の会議等で、納得はかないが仕方がない…というような妥協の流れに全体がなった時でも、筋が通らなければひとりでも異議を唱え、まわりが正論に考えを改めさせられるということを何度も見てきました。そのような信念は教育にも発揮されました。筆者らを含めた門下生は学生時代から昼夜を忘れて研究する環境が提供され、研究生活の基礎を築くための大きな土台を作っていただきました。このように終始一貫して学術研究と学生の教育指導に情熱を注ぎ、強い責任感を持って後進の指導にあたり、多くの優れた人材を育成されました。

最後になりますが、永年にわたる船津和守先生のご貢献に深謝し、謹んでお悔やみを申し上げ、ご冥福をお祈り申し上げます。

Memoir of Prof. Kazumori Funatsu

^{*1} Kajiwar, Toshihisa
九州大学大学院 工学研究院 化学工学部門
福岡市西区元岡 744（〒819-0395）

^{*2} Tanoue, Shuichi
福井大学 繊維・マテリアル研究センター
福井市文京 3-9-1（〒910-8507）

^{*3} Kihara, Shin-ichi
広島大学大学院 工学研究科 化学工学専攻
東広島市鏡山 1-4-1（〒739-8527）
2020.1.6 受理